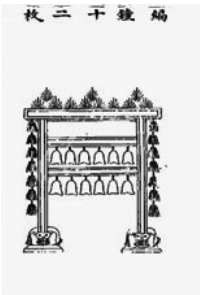
出土楽器が語る音の世界―編鐘をめぐって―

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

中国の出土楽器というと、誰もが一番に挙げるのは、湖北省随州市西郊で1977年に発見され、翌年発掘された戦国前期の大型木槨墓「曾侯乙墓」（紀元前433年頃）からの多くの楽器群のなかでも、青銅製の65件の編鐘（下図　『中国音楽史図鑑』人民音楽出版社1988年　24・25頁）であろう。それは世界八大奇跡と中国が誇るものであり、わたしが留学した1986年にも、確かに留学生が必ず行くべき見学コースとして編鐘を所蔵する湖北省博物館が設定されていた。また2023年の春節を祝うCCTVが編鐘演奏を誇らしげに放映したのは記憶に新しい。

編鐘の出土については、以前『中国音楽の泉』（グローカル新書9、2008年）でも紹介したが、あれから15年、この編鐘の中国音楽史上での重要性は少しも色あせることはない。その後の中国の研究をみると、たとえば中国芸術研究院音楽研究所副所長の黄敬剛『中国先秦音楽文物　考古与研究』（人民出版社　2017年）は、殷周から春秋戦国期へと青銅製の音楽文物を中心に筆を進めて、やはり曾侯乙墓出土の編鐘の解明へと向かう。また、中国人民大学東亜音楽考古研究所副教授である王友华「甬鐘的音楽考古学断代」（人民音楽出版社『音楽研究』2021年第1期）は、曾侯乙墓の編鐘の中段の33件と下段の12件を構成する甬鐘（左図、『中国音楽図鑑』26頁。鐘の上部に甬と呼ばれる棒状の重りがあり、その根本の部分で吊り下げる構造となっている）を含めて、年代と地域による中国出土の甬鐘の重量や大きさ、排列の相違を細かく分析している。もはや曾侯乙墓の編鐘は孤立した存在ではなく、一連の青銅製の編鐘のなかに位置付けられる。

では、歴史文献のなかで編鐘は、どのように記されているのか。周王室の諸制度が記される『周礼』春官の磬師に、「磬師は、磬を撃ち編鐘を撃つを教うるを掌る」とあって、磬という石でできた音階楽器とともに編鐘がみえる。そこに階級別に、王・諸侯・卿大夫・士とそれぞれ別の音楽が奏されたとあり、三層の編鐘を自分の墓に入れた曾侯乙の位の高さが推測できる。また、『礼記』楽記には「鐘の音色はカーンと響いて堅強さを感じさせます。その堅強な響によって号令を下し、号令によって士気を充実させ、士気の充実によって武勇を奮い立たせます。（鐘声鏗。鏗以立号、号以立横、横以立武）」（福永光司『芸術論集』朝日新聞社1977年　123頁）とある。士気の充実や武勇を奮い立たせるという鐘の音色がこうして経書に記されて、伝承されていくうちに、そのイメージが定着するのかもしれない。編鐘は、為政者の宮廷雅楽で欠かせない楽器となって、清朝まで用いられた。左図は宋代にまとめられた音楽事典である陳暘『楽書』にみえる編鐘である（『四庫全書』より）。鐘の数が少なく、単純な形になっていて、前掲の曾侯乙墓からの出土物との格差は歴然としている。



曾侯乙の編鐘とは違い、誰にでも演奏できそうにみえてしまう。

中国では唐代に雅楽を掌ったのは、太常寺という宮中音楽機関であり、そこの長官を太常卿と称した。宴饗音楽（坐部伎・立部伎）において力量不足の楽人が雅楽を操ることを嘆いて白居易は以下のように言う。

> （坐部伎から退けられて立部伎へと移り）立部伎からも退けられて何をするかというと、そこで始めて楽懸（楽器の棚）に吊された鐘や磬にむかって、古代の正しい音楽を操ることになる。古代の正しい音楽はここまで廃れてしまった、おまえたちに長らく雅楽の音階を調えさせるとは。円丘・后土の天地の祭りに、天の神、地の祇を感動させるのだと彼らは言うが、こんな音楽で鳳凰を飛来させ百獣を舞わそうというのは、車のかじ棒を北に向けて、南の楚の国へ行こうとするようなものだ。楽人は愚かで卑しいものなので仕方ないにせよ、太常寺の長官副官たちおまえたちは何者なのだ。（立部又退何所任、始就楽懸操雅音。雅音替壊一至此、長令爾輩調宮徴。円丘后土郊祀時、言将此楽感神祇、欲望鳳来百獣舞、何異北轅将適楚。工師愚賤安足云、太常三卿爾何人）「立部伎」（『白居易集箋校』巻三）

「楽懸」に吊るされた鐘や磬とは、つまり編鐘・編磬のことであり、能力不足の楽人でも演奏できる音楽と認識されていたようである。ここには、諷諭の意味があるものの、古の音楽はこんなレベルのものではなかったのにという古楽に対する憧憬が隠れているようである。

宋代になって、とりわけ仁宗期（1022～63）には考古学の前身ともいえる金石学との結びつきにより、古楽器の発掘に力が入れられた。沈括『夢渓筆談』巻五には、皇祐年間（1049～54）に、杭州の西湖の側らから古鐘がでてきたという記載がある。それは、先ほどみた「甬鐘」という形態であって、甬の部分が中空なことで、その吊り下げ方法を入念に分析しているようである。宋代の音楽とは異なるだろう古楽に対する旺盛な関心のもと、発掘される古楽器の中に編鐘もあった。宋代文人の蘇軾は以下のように記している。

> 黄州の西北百余里のところに欧陽院があり、その寺院の僧が古編鐘を一つ持っていた。僧が言うには、耕作者から得たもので、その土地を掘ってみると四つの鐘が出土したが、そのうち二つは鋤が当たって壊れ、一つは銅の鋳造者が持ち去り、一つだけがここにあるということだった。その音は空ろだが、古意にみちていて、古代の韶・濩の音楽を知らぬものでも、当時の音楽をまざまざと想像することができるようだ。（黄州西北百余里、有欧陽院、院僧蓄一古編鐘。云得之耕者、発其地、獲四鐘、斸破其二、一為鋳銅者取去、独一在此耳。其声空籠、然頗有古意、雖不見韶濩、猶可想見其髣髴也）「書黄州古編鐘」（『蘇軾文集』巻七一）

蘇軾が古編鐘に「古意」を聞き取って、古楽の素晴らしさに想像を巡らせたのは、現在の研究者がさまざまな角度から曾侯乙墓の編鐘を分析して、その音色に迫ろうとしている気持ちと、どこかで結びついているのかもしれない。そこにすでに失われてしまった何かを聴き取ろうとしたのではあるまいか。